2024年01月15日 中日新聞 朝刊 18頁

美濃を治めた加藤貞泰

県博物館 愛媛・大洲との関係解説

関市小屋名の県博物館で14日、岐阜市の黒野城主として美濃国を治めた大名・加藤貞泰を紹介する講演会が開かれた。京都府立大文学部歴史学科の東昇教授(51)が「加藤貞泰と家臣団 美濃から伊予大洲へ」と題して講演し、101人が耳を傾けた。

東教授は、加藤家が美濃から大洲(現・愛媛県大洲市)へと至るまでの経歴を紹介。羽柴秀吉に仕えた貞泰の父・光泰が美濃の出身で、秀吉の勢力拡大と合わせて出世して大名となったという。光泰の没後、14歳の貞泰が家を継ぎ、先祖の地に近い黒野から再出発。関ケ原の戦いや大坂の陣で戦功を立て、1617年から大洲藩を治めた。

1800年代前半の記録によると、当時加藤家に仕えた63の家臣のうち、約半数が美濃由来だという。東教授は「200年もの長い間、美濃の家臣が大洲藩を支えたと言っても過言ではない」と評価。大洲と岐阜の関連にも言及し、大洲市周辺に自生するオオズタンポポと東海地方のトウカイタンポポが同種であるとする愛知教育大の研究を紹介し、貞泰の国替えと分布が一致していると指摘した。

加藤貞泰について講演する東教授＝関市小屋名の県博物館で

江戸時代中期から幕末にかけては、大洲藩が将軍にアユを献上しており、貞泰が黒野城主の時代にアユを献上していた名残ではないかと推測。徳川家康がアユを喜び貞泰宛てに送った礼状も残っているという。

大洲市出身の東教授は「今までずっと大洲の視点で研究していたが、美濃の視点に広げることで、ここが加藤家にとってとても重要な土地であることが分かった。大洲と岐阜の距離は遠いが、密接な関係にある」と話した。(華原士文)

(c).中日新聞社　無断転載、複製、頒布は著作権法により禁止されています